

新聞を活用し、体験から得た学びを深める

兵庫県立武庫荘総合高等学校 教諭 川村 道雄

1 はじめに

平成 24 年度、奨励枠で実践校指定をいただき、「まなび支援部」が窓口となって N I E の取り組みを始めた。この 3 年間、年次の協力も得て **Manabee Morning** (朝の S H R で読ませたい記事を選んだもの) を週 2 回のペースで出し続け、年に 3 回新聞課題を出して、感想を **Manabee** (まなび支援室だより) に載せ発行してきた。生徒の知性と感性に働きかける新聞の力を改めて認識できた 3 年間だったように思う。3 年目を中心に取り組みの概略をまとめることにする。

(注：単位制である本校は、「学年」ではなく「年次」と言い表している。)

2 オリエンテーション合宿で

入学後すぐに生徒は 2 泊 3 日の校外合宿に出かける。平成 24 年度はこの合宿で、「なぜ勉強するのか」を考えて発表する H R 活動を実施することになった。企画作りの段階で、個人思考からグループディスカッションを経てひとまず答えを出した後、自分たちの知らない社会の一面に触れることができる文章を与え、そこで得た気づきを取りこませたいと考えた。

このとき読ませたのが、「夢は流されない」という見出しの新聞記事(2012 年 2 月 12 日付 北海道新聞朝刊)であった。**HAPPY NEWS 2011** 入選作品が掲載された「**HAPPY NEWS 第 8 号**」(日本新聞協会 4 月 6 日

発行)で目にとまった記事である。夫の死後、定時制高校に通って学び、東日本大震災で津波にのまれながらも一命をとりとめ、大学進学目標を貫いて合格を果たした 67 歳女性を取材したものだ。午後 5 時半に始まる教室でのインタビュー。生徒の日常とはかけ離れた世界であったと思われるが、学ぶ意欲を持ち続ける人生の先輩の言葉は、入学後まもない生徒の心に響いたようだ。黙々とシートに感想を書き込んでいく姿が見受けられた。

3 **Manabee Morning**

朝の S H R で新聞記事を

週 2 回、朝の S H R で短い記事を読ませる活動を 3 年間続けた。用紙は A 5 に統一し、1 回の分量が多くなりすぎないように配慮している。24 年度に 3 年次となった 8 回生は、入学時から N I E の取り組みを続けてきた初めての回生である。3 年目を迎えるにあたり、朝の S H R は漢字の学習に当てる一方、週 1 回 L H R の時間に「**Manabi Times**」と題して引き続き新聞記事を読ませることにした。50 分の中で融通をきかせてもらえると期待し、5 分程度あれば読める内容を A 5 両面に印刷して、ファイルに綴じさせていった。

さて 1・2 年次対象の「**Manabee Morning**」の方は、年間 50 号を目途に発行していった。行事をにらみながら、学校生活と関連づけて生徒に読ませたい記事を選ぶ苦労は並大抵ではないが、記事選びの基準や方法に関してこ

の3年で得たことも多くある。その中でも特記すべきこととして次の2点がある。

(1) 年次の先生提供の記事が増えたこと

新聞記事は、各年次の先生からも提供していただいている。身近な先生からの直接のメッセージと生徒が受け止めることができる点や、記事選びの視点が多様化する点など、プラス面は多くあった。こうして教員間の協力体制ができあがったことが、3年間で一番の目立った成果と考えている。

(2) 難しいからやめておこうと、二の足を踏む必要はない。今はわからなくても与え続けることに意味があるという視点に立てるようになったこと

2月の高校推薦入試以降は、「おうちDE Manabee Morning」を持ち帰らせ、心に残る言葉を書きとめるスペースを設けて、長い記事にも取り組ませた。時間の制約がない分、読ませたい文章を思い切って載せることにした。その取り組みの中で、読ませた後に次の活動へと展開することができた事例を、次項で述べる。

4 Manabee Morning をきっかけに新たな学びへ

(1) 賛否が分かれそうな記事を読み、議論へと発展できた例

2013年1月19日の日本経済新聞に、米Googleが実現を目指す「スマートテレビ」の視聴スタイルを紹介する記事が掲載された。好みの番組を先読み配信してくれる「究極のネットテレビ」の実現はそう遠くないと、記事は結ばれている。そこで、「自分の好みや関心に合ったものをスムーズに楽しめることに大きな魅力を感じる」のか、「たくさんの中から取捨選択できることに価値を置く」のか、という問いかけをして生徒の意見を募った。

生徒からは「ネットテレビ」に好意的な感想が目立ったが、情報の先生からの「自分の好み以外のものは見せてくれないことをどう考えるか」というさらなる問いかけを載せた「Manabee」（生徒の意見を吸収して返信する支援室だより）を教室で担任の先生に読んでもらうことで、生徒の考え方を揺さぶる機会を作ることができた。

2012年9月18日の毎日新聞「発信箱」は「スポーツマンシップ考」という見出しの文章だった。「勝敗が明白になった時点で、相手に屈辱を与えないよう、それ以上の点差が開かないように配慮する」米国式のスポーツマンシップと、いかなる状況にあっても「真剣勝負を重んじる」日本式のスポーツマンシップ。記者の息子さんが米国滞在中に体験した試合の様子をまじえ、万国共通ではない「スポーツマンシップ」のあり方を話題としていた。そこで、「あなたは日米どちらの考え方に共感しますか」と問いかけて生徒の意見を募り、LHRでのグループワークへと発展させた。その一部を次に紹介する。

- ・ アメリカのスポーツマンシップは、相手が手を抜かなかつたという逃げ道が用意されていない分、負けた現実を重く受け止めなくてはならない。逃げられないという点で好ましいと私は思う。
- ・ アメリカでは結果を重んじ、日本では過程を重視する。私が負けている側だったとして、達成感があるのは全力でぶつかり合って大差で負けた方だ。次に向けて努力しようという意欲がわいてくる点で、私は日本の考え方の方が好きだ。

最後の総合体育大会での試合だったらどうだろうかなどと、自分に関わりのある問題と

受け止め、自身の体験に基づいた意見のやりとりを行うことができていた。

(2) 高校生エッセイコンテスト入賞作品
を手がかりに、主張型の文章作成へと発展できた例

2013年3月9日の産経新聞掲載の「JICA国際協力高校生エッセイコンテスト 2012 入賞作品」は、海外支援の現状と問題点を自分の体験に基づいて浮き彫りにし、解決に向けて提言するというわかりやすい型で書かれていた。その作品の構成を真似たアウトライン作成シート（下段参照）を用意し、一度そこに書き込ませてから400字の意見文「私の提言」を完成させた。「心を揺さぶられた体験」から始め、「その体験を通して見えてきた課題」を問いの形で明確化し、それに対する答えを具体的に書き出していき、最後に結論をまとめる。文章の端々に書き手の個性が感じられ、400字をしっかりと埋めてきた作品が目立ったのも特徴的である。

アウトライン作成シート	
「Manabee Morning 99号」の原稿図を参考に、あなた自身の体験を題材にして意見文（感想文ではありません！）を書いてみましょう。まずは、箇条書きで次のシートを埋めていきます。	
①心を揺さぶられた体験（いつ/どこで/どんなこと） 『ポイント』事実を書く	
いつ どこで	(例) 3月21日に体育館で行われたSAMDで
どんなこと 見たこと 聞いたこと	〇〇先輩が給本の読み聞かせのボランティアをしてから自分の考えが変わったという話をしてくれた。
↓	
②その体験を通して見えてきた課題 『ポイント』意見文（論文）は「？」から始まる。解決すべき課題（問題点）を見つけ出し、問いを作ろう。 問いができたら a 疑問文になっているか b その問いのテーマに普遍性（みんなと議論できる）はあるか c ①の体験との間わりがあるか をチェックしよう。	
私が立てた 問い	年下の子どもたちとナマメの関係を築くために、高校生としてどんなことができるか。
↓	
③課題を解決するにはどうすればよいか（私の提言） 『ポイント』思い浮かんだアイデアを列挙していく。 その中で具体的な手だてが浮かんできたものには（一矢印）をつけ、工夫できる点を詳しく書こう。	
.	
.	
.	
↓	
④結論（ゴールを決める） 『ポイント』上の提言を絞り込んだり、まとめ直したりして、②の問いに対する答えを作る。	
.	
.	
.	
※ このシートの順序で、400字の文章を書いてみよう。いざチャレンジ!!	

5 朝日新聞大阪本社企画「新聞読み方講座」実施校となって

(1) 内容

第1回 新聞を知ろう

新聞・テレビ・インターネット、それぞれの長所と短所を考えるワーク

第2回 新聞読み解き術

天声人語の音読（6人でリレー読み、1分間でどこまで読めるかに挑戦）、書き写しノートに初めの二つの段落を5分間で写すワーク、バラバラにされた段落を元に戻すワーク

第3回 自分の意見を持とう

声欄掲載の文章を使って「一人ディベート」

①論点をつかむ(何について書かれているか)

②投稿者の意見・理由を読み解く

③反論してみよう(自分なりの理由をあげて)

「節電で原発再稼働期間を短縮すべし」という意見にあえて反論する練習

(2) 対象

2年次国語表現Ⅱ選択者（32名）

(3) 実施日時と講師

9月6・13・20日（木）に3週連続で朝日新聞大阪本社の菅野氏による講義と演習

(4) 成果と課題

新聞の価値を知り、考える力と書く力をつけるねらいで3回の授業を組み立てていただいた。毎回、机上に配布した新聞をパラパラめくって興味ある記事を読む活動から始まり、音読や書き写し、ディベート等の学習へと進んだ。広告に注目したり、扱いは小さいけれども見逃せない記事を発見する楽しさを味わったりしている様子が見られ、生徒の反応はよかった。その中で「一人ディベート」は、演習の時間が短かったことや、生徒の知識不足などから、今ひとつ深まりが感じられなかった点が課題である。今後の授業の中で継続して指導していく必要があると思われる。

6 ニュース時事能力検定の実施

本校では、平成 24 年度からニュース時事能力検定を実施している。変化の激しい現代社会を生きるうえで、課題意識を持って主体的に新聞記事やニュースにアプローチしていく姿勢は欠かせない。そこで、学校での学びが世の中や将来につながっている認識を持たせ、生徒自らが自分を生かして社会と関わっていくきっかけとなることを願って、ニュース時事能力検定を導入した。

24 年度は、第 17 回、18 回、19 回の計 3 回の検定に、28 名がチャレンジした。3 年次の総合的な学習の中で「ニュース検定に挑戦！」というゼミを開講し、そこに集まった生徒が中心になって積極的な取り組みを見せた。合格者も多数で、大学等進学先でさらに上級を目指して行ってほしいと考えている。今後も総合的な学習での展開を基盤にし、生徒への呼びかけを広めていきたい。

7 第 3 回「一緒に読もう！新聞コンクール」応募

年に 1 度はコンクールに応募して、生徒の意欲を高めるきっかけ作りをしたいという思いから、夏休みの課題で「一緒に読もう！新聞コンクール」への応募を決めた。昨年は「HAPPY NEWS 2011」に応募している。今回応募の形態を変更した理由として、記事を選んだ理由をまとめて書く欄があることと、身近な人に読んでもらって感想を聞き、それを取り込んで自身の感想を深めるという学びのかたちに魅力を感じたことがあった。

応募用紙は A 3 の右側に新聞を貼って、左側は次の 4 つの問いに答える形になっている。

- ① 記事を選んだ理由（100 字程度）を書く、
- ② 読んで思ったことや考えたことを書く（150 字程度）、
- ③ 家族や友だちなどに読んで

もらい、その人の意見を聞きとって書く（150 字程度）、④ 話し合った後の自分の意見や提案・提言を書く（400 字程度）、というものである。足すと 800 字程度になるが、無理なくステップアップできるように工夫されているおかげで、400 字や 800 字をまとめて書く課題と比べ、生徒の取り組みは良好であった。

さて、兵庫 N I E ニュース第 41 号に掲載された通り、高校部門の最優秀賞に本校 2 年次の山本千裕さんが選ばれたのは、本当にうれしいニュースだった。大学のオープンキャンパスで知ったある海外ボランティアの活動が頭にあったこと、母親の言葉にはっと気づかされることがあったということを中心にまとめたものである。本人のこうした話を聞いていると、体験を定着させるきっかけを、逃さず自分のものにしていくことに気づかされる。そこに新聞が果たしている役割は大きい。情報を見逃さず立ち止まり、断片的な知識で終わらせずに自分の関心事に結びつけ、つないでいく力がこの生徒の中で着実に育ってきている。今回、最優秀賞のほかに 2 年次生 2 名が奨励賞、そして学校賞も受賞できたのは、入学後継続した新聞課題への取り組みの成果と受け止めている。

8 おわりに

活動 3 年目を振り返って、昨年度も課題として挙げた「感じたことを広げ、深める」にはまだまだやるべきことが多いと感じている。それでも、Manabee や Manabee Morning に対する感想を同僚の先生方から頂戴する機会も増えつつあり、今後も授業や総合的な学習などで新聞を積極的に取り入れた実践を積み重ね、生徒が自己の成長を実感できる学校づくりに励んでいきたいと思う。